

いま寺ここに生きる～問いとともに歩む生活を～

「人と生まれたこと…本当に尊ぶべきこと」

2021 年 9 月 9 日 大谷大学 藤原正寿

1. はじめに

「コロナ禍」とコロナウイルスの感染拡大を「禍」とする意識

「吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり。」

『仏説無量寿経』『真宗聖典』61 頁

2. 私たちの生きている社会

親鸞聖人は、私たちが生きている時代と私たち自身について「濁世(じよくせ)の庶類・穢(え)悪(あく)の群生」(「信巻」272 頁)と確かめておられます。私たちが人類が生きている時代社会について「濁世」と押されられる親鸞聖人の視線は、人間の歴史を徹底して見、その根に深い濁りが潜んでいることに注がれます。私たち人間は、歴史の積み上げとともにいよいよ深く、あるがままの「いのち」を見失って行くのです。現代はまさしく濁世のただ中にあり、その濁りが増している状況にあるといえるのでは無いかと感じます。

親鸞聖人は、「五濁増のときいたり 疑謗のともがらおおくして 道俗ともにあいきらい 修するをみてはあたをなす」(「高僧和讃」496 頁)(ますます五濁が盛んな時代となって、阿弥陀仏の本願を疑いそしめる人びとが多くなり、僧も在家も、あらゆる人びとは互いに憎みあって、念仏する人に害をあたえるようになる。)と言われます。濁世というのは、ただ濁った世の中という状況を指すのでは無く、時代が進むにつれて、次第にその濁りは増大していく、だからこそ「五濁増」と言われるのでしょう。そこではお互いに相手の顔が見えなくなり、自分さえよければという価値観が正当であると勘違いするようになるのです。

○「濁り」を作り出しているのは誰か？

2. 浄土とは —濁世を生きる根拠(立脚地)—

○浄土真宗とは、浄土を顕らかにする教えである。

→ 主著『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』の構成を見ても明らか。

顕浄土真実教行証文類序

顕浄土真実教文類 一

顕浄土真実行文類 二

顕浄土真実信文類序

顕浄土真実信文類 三

顕浄土真実証文類 四

顕浄土真仏土文類 五

顕浄土方便化身土文類 六

いま寺こに生きる～問いとともに歩む生活を～

「人と生まれたこと…本当に尊ぶべきこと」

2021 年 9 月 9 日 大谷大学 藤原正寿

謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなわち大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土と曰うなり。すでにしつて願います、すなわち光明・寿命の願これなり。

「真仏土巻」聖典 300 頁

○浄土とは→ 光の仏土である

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

「総序」聖典 149 頁

別して本願光明の二徳を挙げて、総じて仏土の体相を述べる

『曾我量深選集』第七卷 21 頁

仏土とは浄土のこと。体はそれ自体、つまり浄土の本質であり、相はそのかたちである。つまり、浄土とは阿弥陀仏の本願を本質とするものであり、浄土とは本願のはたらきのかたち、つまり光明である。私たちにとって浄土とは、光として体験される仏土である。

願成就の文に言わく、仏阿難に告げたまわく、「無量寿仏の威神光明、最尊第一にして、諸仏の光明の及ぶことあたわざるところなり。乃至 このゆえに無量寿仏は、無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無対光仏・炎王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。それ衆生ありて、この光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟なり。歓喜踊躍し、善心生ず。もし三塗勤苦の処にありて、この光明を見れば、みな休息を得て、また苦悩なけん。

「真仏土巻」(光明無量の願成就文) 聖典 300-301

しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。

「行巻」161 頁

→無明の闇が破れたという体験がもつ感動は、同時に自分自身の志願、つまり、本当の願いが何であったのかが知らされ、満足していることに気づく喜び。

○浄土とは(天親・曇鸞)

観彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大無辺在

「真仏土巻」聖典 314 頁

浄土というのは、三界の道に勝過している。つまり三界が三界であることを知らせ、自らの生きている世界、自らが作っている価値観が迷いであることを知らせるはたらきである。どこまでいっても、辺が無いほど広大である。→有辺のありかたを知らせ破る。それがわかるのが、次の『論註』の引文である。

いま寺こに生きる～問いとともに歩む生活を～

「人と生まれたこと…本当に尊ぶべきこと」

2021 年 9 月 9 日 大谷大学 藤原正寿

『註論』に曰わく、「莊嚴清浄功德成就」とは、「偈」に「觀彼世界相 勝過三界道故」と言えり。これいかんが不思議なるや。凡夫人、煩惱成就せるありて、またかの浄土に生まるることを得んに、三界の繫業畢竟じて牽かず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。いづくんぞ思議すべきや、と。

「真仏土卷」聖典 314 頁

また云わく、「何者か莊嚴不虛作住持功德成就。「偈」に「仏の本願力を觀ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし、よく速やかに功德の大宝海を満足せしむる」がゆえにと言えり」(論)。

「不虛作住持功德成就」は、蓋しこれ阿弥陀如来の本願力なり。

「真仏土卷」聖典 316 頁

虚作は「虚しく作す」ですから、「不虛作」は、「虚しく作さず」である。

「住持」は、保持するということ。仏の本願力に出遇うものは、空しく過ぎないのである。

「空過」とは、無意味に時が過ぎるということであり、それは単に個人的なことでは無くて、「自損損他」と親鸞が押さえるように、関係性を失っているということである。したがって「無空過」とは、他者との関係性を回復することにおいて、自分が生きていることに意味を感じることである。

→さて私たちの社会はどこを目指しているのだろうか？

4. おわりに

○ 「ある」という存在が肯定されていく世界に触れることができれば、人は生きられる(芹沢俊介) ←無条件に存在が肯定される世界と出遇わなければ、人は本当安心して生きていくことは出来ない

○・吾人の世に在るや、必ず一つの完全なる立脚地なかるべからず。 「(精神主義)」

・天命ニ安ンジテ人事ヲ尽ス 「(転迷開悟録)」

清沢満之